



かたや 農薬13種類、こなた お湯だけ

下の囲み記事、右側は、農協(全農いばらき)のホームページで見つけた稲の育苗と種モミ処理の注意点です。全部を使えというわけではないにしても、農薬の名前が13種類も登場するのは驚きました。

いっぽう左側の囲みは、去年も紹介したけど、うちでやっている種モミ処理の方法。消毒に使うのはお湯だけです。

じつは昨年、温湯消毒をやったけど苗で病気が出という知り合いがいました。よく聞いてみると、お湯の容器を1つしか用意してなくて、加温が不十分だったことが原因とされました。このごろ専用機械も売ってるようだけど、ありゃムダづかい

だな。(きっぱり)

なお、うちでは育苗用土も無農薬・無化学肥料です。田んぼに、ケイフンとモミガラクン炭を散布し、トラクターで攪拌して採取するだけ。もちろん育苗箱も、農薬なんか使った

ことないけど問題はないなあ。

農協おすすめの育苗は、「過保護」とでもいうんだろうか。米価なんて下がるばかりなのにね。

ちなみに写真は昨年、うちの完全無農薬の苗。十分でしょ。



失敗しない温湯消毒

大きな容器を4つ用意し、2つには温湯を、2つには冷水を満たします。お湯の温度は、片方は60℃。もう片方は少し高めに。網袋に入れた種モミを、まず高温のお湯に漬け、すぐに引き上げます。ザーっと袋から流れ落ちるお湯は、容器の中に戻さないようにします。手でふれるとわかりますが、ずいぶん温度は下がっています。この作業を3回ほど繰り返すと、流れ落ちるお湯も温

かくなってきます。こうして予熱をかけたから、別に用意した60℃のお湯の入った容器にドボンと漬け、やはり2回くらい引き上げては、すぐに沈めるようにします。ようするにモミ全体に均一に温度をかけるわけです。きちんと時計をみて5分間の後、すぐに冷水に。上記と同じように漬けては引き上げる作業を繰り返し、十分に温度を下げて消毒作業は完了です。

水稻育苗期の資材および種子消毒の注意点

1. 育苗箱の消毒

ケミクロンGの1,000倍液に10分間浸漬するか、500倍液に瞬時浸漬またはジョロで散布した後、水洗し日光に十分に当てます。イチバン500~1,000倍液の瞬間浸漬または散布します。

2. 用土の消毒

用土は市販培土または山土(未耕地心土)を用います。また、播種時または播種後次のような薬剤で消毒して下さい。苗立枯細菌病、褐条病およびもみ枯細菌病による幼苗腐敗症に対しては、カスミン液剤4~8倍液を箱当たり50ml処理して下さい。

なお、ダコレート水和剤400~600倍液の箱当たり500ml灌注は、フザリウム菌、トリコデルマ菌およびリゾーブス菌による苗立枯病に、タチガレエース粉剤箱当たり6~8g処理とタチガレエース液剤500~1,000倍液の箱当たり500ml灌注は、フザリウム菌およびピシウム菌による苗立枯病とムレ苗防止に効果があります。

3. 種子消毒

1) 未消毒種子、自家採種種子の場合(表略)

トリフミンは第1葉がよじれて初期生育が若干遅れますので、草丈の伸びにくい品種では管理に注意して下さい。

ばか苗病と苗立枯細菌病など細菌病の発生が心配な場合には、ヘルシード水和剤200倍、スターナ水和剤200倍の薬液に24時間浸漬して消毒をします。

さらに、シンガレセンチュウの発生が心配な場合には、スミチオン乳剤、パイジット乳剤のいずれか1,000倍液になるように調合した薬液に24時間浸漬して消毒をします。

2) 消毒種子の場合

農協で販売している消毒種子は、従来までの消毒とは違って、モミガードCとスミチオン乳剤の混合吹き付けで処理されていますので、そのまま浸漬するだけで、ばか苗病、ごま葉枯病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯病、褐条病、イネシンガレセンチュウのすべてを消毒することができます。